

# 歐陽脩『歸田錄』に見る北宋文人世界

——書畫とその周邊——

大 森 信 徳

## 一 はじめに

まず冒頭に、北宋における書壇の状況を文學・思想とも絡めて概括した蔡顯良『宋代論書詩研究』（人民出版社、二〇一三、三四―五頁）の記述を掲げて本稿の出発点としたい。なお、後ろに附した日本語譯について、括弧内に補足した箇所はすべて筆者自身によるものである。

韓、柳は唐代古文運動の光輝旗手、而歐陽脩、蘇軾則是北宋古文運動的傑出領袖。以柳開爲代表的一派古文家，在宋初首先起來批判唐末五代的浮靡文風，主張文學韓、柳，提倡由古文達於「古道」。其後王禹偁的「傳道明心」說，繼承了韓愈的古文理論，號召文體革新，欲「追還唐風」，在宋初古文運動中有重要的指導意義。其後，「文章百世之師」的一代文學巨匠歐陽脩，反對「太學體」險怪奇澀的文風，帶領古文運動走出低谷走向高峰。歐陽脩「道勝文至」的主張顯然對於他所提倡的「以人論書」觀念具有影響，至於他倡導書法變革，意欲「比蹤唐

室」，與前述王禹偁「追還唐風」の文學主張不謀而合，然内含上追古法的深意又要顯得眼光高遠很多。歐陽修の書法思想在他的論書詩中有所反映。歐陽修在書法上提倡復古，與蔡襄一起領導北宋中期的書法復古運動，與他的古文運動應該基於同樣的審美思維。儒學的復興與古文運動的進展，為論書詩的繁榮發展提供了極好的文化大環境，其中所蘊含的思想變革主張，對於包括論書詩在內的書法領域顯然都有一定的影響。

韓愈と柳宗元は唐代の、歐陽脩と蘇軾は北宋の古文運動における指導者である。宋初において、柳開を代表とする古文家の一派は、まず唐宋五代の華美なばかりで内容が空疎な文體を批判し、韓愈と柳宗元の文章を學ぶことを主張し、古文より「古道（正統な儒學の道を指す。「題歐陽生夷辭後」に「學古道則欲兼通其辭。通其辭者、本志乎古道者也」と見える）に達することを提唱した。その後、王禹偁の「傳道明心（儒學の道を傳え心を探究すること。「答張扶書」に「夫文、傳道而明心也」と見える）」説が、韓愈の古文理論を繼承し、文體の革新を呼び掛けて、「追還唐風（唐代の文體に還ろう）」としたことは、宋初の古文運動において重要な指導的意義があった。その後文學の巨匠たる歐陽脩は、「當時、士人たちの間で流行していた）太學體」の險怪奇澁な文風に異を唱え、古文運動を谷底から高峰へと導いた。「道勝文至（文學の目的は道に至ることにある）」とする歐陽脩の主張は、「以人論書（人格の表出を書に求める）」の書法觀にも明らかに影響を與え、書法の變革を提唱するに至っては、「比蹤唐室（唐代の書に比肩する）」ことを求めた。前述した王禹偁の「追還唐風」の文學觀と圖らずも軌を一にしており、歐陽脩の書法觀はその「論書詩（蔡氏の定義によれば、同時代の書法における美意識や創作思潮を反映し、書壇の活動情報を傳え、書法を詠じることを創作の主題とした詩歌を指す）」のなかにもいくらか反映されている。歐陽脩が書法において復古を提唱し、蔡襄とともに北宋中期の書法復古運動を主導したことは、その古文運動とも

同じ美意識に基づいているとすべきである。儒學の復興及び古文運動の進展は、論書詩の繁榮と發展に極めて良い文化的環境を提供し、その中に含まれる思想變革に關する主張は、明らかに論書詩を含む書法の領域に一定の影響を及ぼしている。

門閥貴族の支配が五代十國の戰亂を経て終焉を迎え、宋代に至り科擧によって選拔された新興の官僚層が皇帝を頂點とする中央集權體制を確立することになる。このような社會全體の構造的變化が、宋學の勃興を促し、それが古文の復興を誘い、さらにそれが書畫論にも影を落としてゆくという大きな連關が想起される。このように、限定された書論という枠組みを越えた文學・思想・文化といった廣い視點から書法を俯瞰しようとする學問的姿勢は注目に値する。この記述に則せば、とくに書（或いは畫）と人格について考える場合に、宋代の儒學は「道學」とも呼ばれ、學問の中心が聖人の「道」の追求にあつたため、文學・書畫論に援用される際にもその色合いが自然濃くなってゆく經緯にも目を配る必要がある。また、唐代の文章を直接的な理想の對象であるとする王禹偁の文學觀と、唐代を魏晉以來の書の傳統を最もよく繼承し、かつそれを充實せしめた時代であるとする歐陽脩の書法觀には、過ぎにし唐代への憧憬という時代觀が通底している。

歐陽脩（一〇〇七—一〇七二）は、周知のように、宋代の學術文化の各方面にわたり新しい變革をもたらした人物である。書法においては、蘇軾を含む所謂革新派と稱される書人たちに理念的先鞭をつけた重要な存在でもある。蔡氏の見解にも示されるように、宋代の書法史を考える上で、歐陽脩を抜きにしては語れないことが容易に理解されるであろう。

本稿で取り上げる歐陽脩が著した『歸田錄』は、序に「歸田錄なる者は、朝廷の遺事、史官の記さざる所と、夫の

士大夫笑談の餘にして録す可き者と、之を録して以て閑居の覽に備うる也」と言うように、氣樂な氣分で書かれた名士をめぐる逸話集である。治平年間（一〇六三—一〇六七）、五十七歳から六十一歳の晩年に書かれ、熙寧四年の致仕以後に改訂されており、その際に公にするには不都合な内容の記事を刪去し、他のものに差し替えたようである。<sup>4)</sup> そんな氣の向くままに綴られたエッセーではあるが、裏を返せば、だからこそ歐陽脩の眞意が披歴されているとも考えられる。また、エッセーという性格上、對象を深く掘り下げて記すことはそれほどないが、逸話の中には當時の人間の交友や、それに伴う文化的様相が活寫されており、後世貴重な資料となつてゐることも事實である。よつて、ここに小稿を草する所以は、『歸田錄』を通じて書畫及びその周邊の文化事情に廣く目を配り、歐陽脩の文化全般に對する眼差しが如何なるものか、その一端を考察することにある。

## 二 字學と字體

これより、關係記事について解説を付け加えながら見てゆきたいと思う。なお、使用テキストは、李偉國點校『歸田錄』（唐宋史料筆記叢刊、中華書局、一九九七年）を底本とし、配列の順序と分斷も同書に據つた。

次の84は、宋庠の字學への造詣の深さをユーモラスに語る逸話である。

宋丞相（庠）早以文行負重名於時、晩年尤精字學、嘗手校郭忠恕『佩觿』三篇寶玩之。其在中書、堂吏書牒尾以俗體書宋爲宋、公見之不肯下筆、責堂吏曰「吾雖不才、尚能見姓書名、此不是我姓」。堂吏惶懼改之、乃肯書名。

宋丞相早とに文行を以て重名を時に負い、晩年尤も字學を精しくし、嘗て手づから郭忠恕の『佩觿』三篇を校し

之を寶玩す。其の中書に在りて、堂吏、牒尾を書するに俗體を以て宋を書して宋と爲す。公之を見て肯て筆を下さず、堂吏を責めて曰く、「吾、不才と雖も尚お能く姓を見て名を書す。此れ是れ我が姓にあらざ」と。堂吏惶懼して之を改め、乃ち肯て名を書す。

宋庠はそのころ早くも文學と德行により名聲を得、晩年はとりわけ字學に精通し、かつて自ら（字學の書の）郭忠恕『佩觿』三篇を校訂し寶とした。宋庠が中書省にいた頃、給仕の役人が公文書を作成するのに、俗體で「宋」の字を「宋」と書いた。宋庠はこれを見て筆を下そうとはせず、その役人を責めて「私は非才といっても、まだ姓名を読み書きすることができる。これは私の姓ではない」と言った。役人は恐れ慌ててこれを書き改め、そこで納得して名を書いた。

宋庠（九九六年—一〇六六年）は開封（河南省）の人。字は公序。初めは宋郊と言ったが、仁宗の命令で庠に改名する。この経緯については45に詳しい。<sup>(3)</sup>天聖二年（一〇二四）進士首席。弟の祁とともに二宋と稱される。仁宗の寶元二年（一〇三九）參知政事に除されるが、絶大な權勢を掌握していた宰相の呂夷簡と意見が合わず、知揚州、鄆州に左遷される。また慶曆五年（一〇四五）に參知政事となり、皇祐元年（一〇四九）から二年足らず宰相を務める。諡は元憲。傳は『宋史』卷二八四に見える。

郭忠恕（？—九七七）は、洛陽（河南省）の人。字は恕先。後周の廣順（九五—九五三）に宗正丞となり、國子書學博士を兼ねた。宋になって太祖、太宗に仕えたが、放縱不羈な性格が災いし二度も流された。博學多識で文字學に精通し、篆・隸書、樓閣林石の畫を善くした。傳は『宋史』卷四四二にある。彼の撰した『佩觿』は字學の書であ

り、上巻では形聲の誤った變化の由來を造字、四聲、傳字の三つに分けて論じ、中下巻に字畫の似たものを取り、四聲によって十段に分類している。書名は『詩經』の「童子佩觿」の句から採っている。

郭忠恕は宋初に夢英と並び篆隸の雙璧と稱せられ、歐陽脩はとくにその楷書を絶賛している。例えば、「郭忠恕小字說文字源」(『集古錄跋尾』卷一〇)には、書法的觀點からの批評ばかりでなく、字學にまで言い及び、歴史的経緯を説明しながら、かかる學問が瀕死の状態にあつて、郭忠恕のような優れた人物が現われないことに歎息を漏らしている。<sup>(6)</sup>

この記事の眼目は宋庠と堂吏との間に交わされるやりとりの面白さにあると思われるが、ことに話題の中心である俗字への言及は、歐陽脩自身の書字の在り方に對する強い關心が發端となり、それが記事の選擇に少なからず作用していたことを示しているのではないだろうか。或いは、「身言書判」を基準とする書を重んじた吏部の試験が宋代に入ってから無くなったことにより、當時の士大夫の文字が唐代の胥吏に及ばなかったという記述が隨筆などに見えることから、胥吏までもが規範的な書字に對する關心を次第に失つていった當時の情況を間接的に反映しているとも考えられる。<sup>(7)</sup>

書寫の日常化に伴い字を崩すようになるのは必然の流れである。南北朝時代に書かれた多くの異體字を挙げれば、龍門石窟の摩崖に數多く残る造像記(佛像製作の發願者、製作者、製作に至る由來などを記したもの)、王羲之などの諸作品に見るが如くである。このような文字使用の混亂した當時の情況について、顔之推(五三二—五九二)『顏氏家訓』「書證」篇等に具體的且つ詳細に述べられている。

文字の混亂情況は、そのまま唐代に引き繼がれたが、科擧試験の採點における便宜のため、既存の楷書の異體字を整理し、由緒正しい文字である「正字」とそうでない文字とが定められた。唐の太宗が孔穎達等に『五經正義』百八

十卷を編纂させるに先立ち、之推の孫にあたる顔師古（五八一—六四五）に命じて『五經』の定本を作成させた。また、師古は定本に使用する漢字の字形を決めるべく、楷書の異體字の整理・検討を行い、『顔氏字樣』（散逸）を著した。さらに、師古の弟の孫に當たる顔元孫は『字樣』を参考にし、『干祿字書』を作った。

『干祿字書』は、約八百文字について異體字を列舉し、それを正・通・俗の三種に分類した實用書である。顔元孫の甥に當たり書家としても名高い顔眞卿（七〇九—七八五）は、『干祿字樣』『干祿字書』を石碑に書いており、そのことは歐陽脩「唐顔眞卿小字麻姑壇記」（『集古錄跋尾』卷七）「唐干祿字樣」（同上）「唐干祿字樣摹本」（同上）「唐顔眞卿射堂記」（同上）「唐湖州石記」（『集古錄跋尾』卷八）にも度々言及されている。両書の眞本は碑文の損傷のため世間には傳わらず、歐陽脩のみが收藏していること。歐陽脩家藏の數ある顔眞卿の書のうち、『干祿字書』の注が最も小さい字形のものであり、それが「持重舒和にして局蹙せず」（『唐顔眞卿小字麻姑壇記』）であると書法の面からの考察も加えられている。

いずれもコレクターとしての觀點から述べたものであるが、『字樣』『字書』の度重なる言及からは、それらの書物を通じて歐陽脩が字體に對する關心を深めていったことが彷彿とされる。そうして培われた歐陽脩の文字文化に對する見識に基づき、俗字を話題として取り上げるに至ったのであろう。他方では、官僚社會の公文書に見られる畫一化された文字は、以後、館閣體、院體、明代には中書格などと稱され、蔑まれる風潮も生まれた。

次に飛白という書體に關する記事が『歸田錄』に二條見える。そのほか、歐陽脩「仁宗御飛白記」（『居士集』卷四〇）にも見え、いずれも仁宗の飛白書を讀える内容となっている。29には次のようである。

仁宗萬機之暇、無所玩好、惟親翰墨、而飛白尤爲神妙。凡飛白以點畫象物形、而點最難工。至和中、有書待詔李

唐卿撰飛白三百點以進、自謂窮盡物象。上亦頗佳之、乃特爲「清淨」二字以賜之。其六點尤爲奇絶、又出三百點外。

仁宗萬機の暇に、玩好する所無く、惟だ翰墨に親しみ、而して飛白尤も神妙爲り。凡そ飛白は點畫を以て物形を象り、而して點最も工み難し。至和中、書待詔の李唐卿飛白三百點を撰して以て進むる有り、自ら謂らく物象を窮め盡すと。上亦た頗る之を佳とし、乃ち特に「清淨」二字を爲して以て之に賜う。其の六點尤も奇絶たりて、又た三百點の外に出づ。

仁宗は諸々の政務の餘暇に、無用なものを愛好することがなく、ただ筆墨に親しみ、飛白がとりわけ優れていた。およそ飛白は點畫によって物の形をかたどるため、點を上手く書くのが最も難しい。至和年間、書待詔の職にあった李唐卿は飛白三百點を選んで献上し、物の形を窮め盡していると自負した。仁宗もまた非常にこれを良い出来榮えであるとして、そこでとくに「清淨」の二字を揮毫して唐卿に下賜した。そのなかの六點は絶妙であり、三百點のなかで傑出してゐる。

宋代では書院と同様に御書院が置かれた。御書院は「翰林御書院」の略稱であり、翰林院の管轄下に置かれ、書待詔のほかには書藝藝學や祇候が所屬していた。書待詔はおもに御製、御書、筆翰及び書籍に關することを掌った（『宋會要』「職官」三三五參照）。

飛白は、刷毛や箒のような筆を使って書かれる裝飾的な書體である。後漢の蔡邕を創始者とし、左官が白壁に刷毛

で字を書いていることにヒントを得たという。本来どのようなものであったか諸説あり詳らかにしない。唐の張懷瓘『書斷』によれば、王隱と王愔は、「飛白は楷製（八分を指す）を變ずる也」と言い、王僧虔は「飛白は八分の輕き者なり」と言う。北宋の黃伯思『東觀餘論』上「論飛白法」には「其の絲髮の若き處は之を白と謂い、其の勢飛擧するは之を飛と謂う」と言う。現存する唐の太宗「晉祠銘」や則天武后「昇仙太子碑」などを見れば、一字の點畫が黒一色ではなく、部分的に緋模様めくものや、末筆が風にはためく吹き流しのような状態に作る。

飛白書は漢から唐にかけて盛んに行われ、北宋に入ってから宮廷の題額や石碑の額に使われ、皇帝の權威の象徴としてあった。道教との関わりもすでに指摘されていることから、文字の本來持つ神祕性を具象化していることが、皇帝の御書や題額などに使用される所以であると考えられる。『宋史』卷二六六蘇易簡傳には、淳化二年（九九一）十月、翰林學士承旨の蘇易簡は『續翰林志』二卷を献上した際、太宗は薄絹に飛白體で「玉堂之署」の四文字を大書し下賜したとある。明の陶宗儀『書史會要』卷六では、北宋の各皇帝の書について評論を加えており、飛白書については、太宗、仁宗を高く評價している。

○太宗諱昊、太祖弟。載橐弓矢、垂意翰墨、真草八法、草入三昧、行書無對、飛白入神。

○仁宗諱禎、真宗第六子、天德純粹、無聲色畋游之好、平居時御翰墨。特喜飛白體、執適勁可入能品。

79には、次のようにある。

皇祐二年、嘉祐七年季秋大享、皆以大慶殿爲明堂。蓋明堂者、路寢也。方於寓祭園丘、斯爲近禮。明堂額御篆、

以金填字、門牌亦御飛白、皆皇祐中所書。神翰雄偉、勢若飛動。余詩云「寶墨飛雲動、金文耀日晶」者、謂二牌也。

皇祐二年、嘉祐七年の季秋大享、皆な大慶殿を以て明堂と爲す。蓋し明堂なるは、路寢也。園丘に祭寓するに方び、斯れ近禮と爲す。明堂の額の御篆は、金填字を以てし、門牌もまた御飛白なり、皆な皇祐中に書する所なり。神翰雄偉、勢は飛動の若し。余が詩に「寶墨、飛雲動き、金文、耀日に晶あきらなり」と云う者は、二牌を謂う也。

皇祐二年、嘉祐七年の季秋の大享（大饗）は、大慶殿が明堂としての役割をした。思うに、明堂は天子の正殿である。（明堂で執り行われる季秋の祭祀は、）南郊壇での象徴的な祭祀と同格に扱われることになり、これが近頃の禮制となった。明堂に掲げられた仁宗の篆額は金字に塗られ、門牌もまた仁宗の飛白書であり、いずれも皇祐年間に揮毫されたものである。非常に優れていて雄壯で、筆勢は飛動するかのよう（躍動感があり）、私が詩に「寶墨、飛雲動き、金文、耀日に晶あきらなり」と詠んだのは、この二牌を指すのである。

皇祐二年（一〇五〇）の冬至は南郊の大禮に当たっていたが、その日が晦日になるため、それを忌避し、季秋の明堂大饗をもってそれにかえようという意見が出された。宋庠（84参照）、祁兄弟が中心となって禮制が検討され、「明堂は布政の宮、天子の路寢（政を聽く正殿）」という原則が掲げられて、國都開封の皇城の中心をなす大慶殿が一时的に明堂の役目を果たすことに決まった。<sup>9)</sup>要するに、朝賀、外國使謁見など、國家儀式の時の建物を臨時に「明堂」

として使用することにほかならない。また、宋代の明堂にはそれまでと大きな差異ができ、南郊の大禮とすべてが同格に扱われるようになった（梅原郁「皇帝・祭祀・國都」中村賢二郎編『歴史のなかの都市―續都市の社會史』ミネルヴァ書房、一九八六所収 参照）。

「寶墨飛雲動、金文耀日晶」の詩句については、『居士集』卷一三「明堂慶成」に「寶墨飛雲動、金文耀日晶。從臣才力薄、無以頌休明」と見える。「端明殿學士蔡公墓誌銘」（『居士集』卷三五）に「（嘉祐）七年、季秋大享明堂、後數月、仁宗崩」とあり、明堂で行われた祭祀の後、程なくして仁宗は崩御する。仁宗の治世に進士に擧げられ、天子の弟子としての自覺を持つ歐陽脩は、明堂や門牌に掲げられた仁宗の書をとりわけ感慨深く眺めたことと想像される。

しかしながら、この飛白書は宋初からすでに翳りを見せていたようである。朱長文『續書斷』上「宸翰述」に、

（太宗）飛白の筆勢工みなるもの罕なり。吾れ亦た此れ自り廢絶せんことを恐る。蓋し深く書法の缺墜を慮りて、勤めて以て之を興さんとす（中略）古自り飛白は傳うる者有ること罕なり。惟だ先帝（眞宗を指す）の已墜に興し、永く將來に輝かす。厥れ惟れ艱い哉。

とあり、太宗は飛白が廢れてゆくのを憂慮して、復興させようと勤めた。眞宗もまた衰微していたのを再び盛んにして、將來に展望を開こうとしたが、まことに難事であったという。かくして、飛白書は北宋後半には文献から影を潜めるようになってゆく。

## 三 書畫と詩

次の66は、五代北宋の畫の大家が名を連ね、名畫に關する當時の流布狀況と歐陽脩の繪畫觀が窺われる。

近時名畫、李成、巨然山水、包鼎虎、趙昌花果。成官至尙書郎、其山水寒林、往往人家有之。巨然之筆、惟學士院玉堂北壁獨存、人間不復見也。包氏宣州人、世以畫虎名家、而鼎最爲妙、今子孫猶以畫虎爲業、而曾不得其髣髴也。昌花寫生逼真而筆法輒俗、殊無古人格致、然時亦未有其比。

近時の名畫は、李成、巨然の山水、包鼎の虎、趙昌の花果なり。成、官は尙書郎に至る。其の山水寒林は、往往にして人家之有り。巨然の筆は、惟だ學士院玉堂の北壁に獨り存す。人間復た見ざる也。包氏は宣州の人、世に虎を畫くを以て名家たり、而して鼎最も妙爲り。今、子孫は猶お虎を畫くを以て業と爲し、而るに曾て其の髣髴たるを得ざる也。昌の花、寫生眞に逼る。筆法輒俗、殊に古人の格致無し、然れども時に亦た未だ其の比ぶる有らず。

近頃の名畫には、李成、巨然の山水、包鼎の虎、趙昌の花果がある。李成は、官職が尙書郎に至った。その「山水寒林」は民間に點在するが、巨然の畫は學士院玉堂の北壁に残るのみで、世間では再び流布することはなかった。包氏は宣州（安徽省）の人で、代々虎の畫によって名が聞こえ、なかでも包鼎が最も優れていた。今、子孫もまた虎を畫くことを生業としているが、すこしも包鼎の畫の面影はない。趙昌の花は、本物そっくりに寫し描

かかれている。筆法は軟弱であり古の優れた人物の風趣はないが、當時、趙昌に比肩するものが世に輩出されなかった。

李成（九一―九六七）は唐の宗室出身。字は咸熙。原籍は長安であるが、唐末五代の戦亂を避けて、營丘（山東省益都）に移る。宋初、司農卿の衛融に招かれて河南淮陽に移ったが、日々酒に耽り醉死したと伝えられる。山水畫のなかでも平遠山水を得意とし、淡墨を用いる點が特色で、「墨を惜しむこと金の如し」と評される。また、北宋末にはすでに眞蹟は非常に少なく偽作が多くなり、米芾が「無李論」を唱えたほどであった。『宣和畫譜』に一八九幅の作品を著録するが、その眞偽は分からない。歐陽脩は李成が尙書郎に至ったと述べているが、後の王闢之『澠水燕談錄』、王明清『揮塵錄』より誤りであることを指摘されている。<sup>11)</sup>

巨然（江寧（南京）の人。開元寺の僧。生卒年不詳。南唐の滅亡により、李煜につき従って開封（河南省）に移り、開寶寺に住した。師の董源と並び「董巨」と稱され、南宗畫の代表的畫家とされる。また、荊浩、關仝とともに五代北宋の四大山水畫家に數えられる。淳化三年（九九二）頃、蘇易簡は巨然に命じて、翰林學士院廳の玉堂とその後廡の二書閣に煙嵐曉景の山水を描かせ壁面を飾らせた。玉堂の後壁に描かれた巨然の山水については、歐陽脩「跋學士院御詩」に「院中の名畫、舊董羽の水、僧巨然の山有り、玉堂の後壁に在り」とあり、また錢惟演『金坡遺事』に「玉堂の後の北壁の兩堵に董羽の畫ける水、正北の一壁に吳僧巨然の畫ける山水、皆な遠思有り、一時の絶筆也」とあって、董羽の畫水とともに、當時の士大夫たちから絶賛されたことが知られる（小川裕充「院中の名畫」『鈴木敬先生還曆記念中國繪畫史論集』吉川弘文館、一九八一 參照）。

李成の畫が民間に點在する一方で、巨然の畫が世間にほとんど流布していないという記録は、北宋初期の蜀や南畫

の優位から状況が大きく變化しており、北宋中期における李成の畫名が歐陽脩のような大官にも聞こえていたことの貴重な證言となつて<sup>(13)</sup>いる。

包鼎は宣城（安徽省宣城）の人。虎を描くのを得意とし、この記事では「最も妙たり」と高い評價を與えている。しなしながら、『圖畫見聞誌』には、父の包貴には技量が及ばなかったとする評價を加える。<sup>(14)</sup>『宣和畫譜』はさらに厳しく、當時名聲がなかったわけではないが、畫風が卑俗で粗野であることから、この『畫譜』に採録するに値しないとまで述べる。<sup>(15)</sup>『圖畫見聞誌』の成書年は不明であるが、この書が熙寧七年（一〇七四）に至るまでの畫家を採録していることから推察すれば、或いはこの『歸田錄』の記述が包鼎に關する最も早い記録である可能性も否定できない。

趙昌は北宋の花鳥畫を代表する畫家である。生没年不詳。字は昌之。劍南（一説に廣漢とも言うが、ともに四川省）の人。蜀の花鳥畫家の滕昌祐を師としたが、技量は師を凌駕し、また徐崇嗣に没骨法を倣う。草蟲、花果の畫に優れ、枝の一部を寫した折枝畫が多く傳えられている。自ら「寫生趙昌」と號した。眞宗大中祥符（一〇〇八—一〇一六）に活躍したが、軽々に作品を人に與えず、外に流出したものは晩年自ら買戻したため、世に傳わるものは稀である。

畫論では、劉道醇『聖朝名畫評』卷三花卉翎毛門第四・妙品、郭若虛『圖畫見聞誌』卷四紀藝下・花鳥門、『宣和畫譜』卷一八花鳥四に傳記が見える。『聖朝名畫評』には、趙昌が丁朱崖から長壽の祝いに白金五百兩を贈られたことに感じて、蔬果をにわかに畫いた逸話を併せて載せる。『聖朝名畫評』（「得形似」）『圖畫見聞誌』（「精者也」）はともに趙昌が對象を精密に寫生（模寫）する畫風を褒貶を交えず評價するに止まるが、『宣和畫譜』には、

畫工は特だ其その形を取る耳、昌の作の若きは、則ち特だに其の形似を取るのみならず、直に花の與に神を傳うる者也。又た雜うるに文禽猫兔を以てするも、議する者以て謂らく其の長ずる所に非ずと、然らば妙處は正に是在らず。觀者以て略す可べ也。

とあり、一步進めて、その素晴らしさは對象を精密に寫し取る「形似」にあるのではなく、花の内に宿る「神」を畫いたところにあると述べる。ここには、趙昌がたんなる職能として繪畫の制作に従事する「畫工」の如きものではないことを強調する撰者の苦しい辯明が見て取れる。

一方、歐陽脩は上掲の畫論の評價とは異なり、「筆法輒俗、殊に古人の格致無し」と手厳しい評價を下している。そこには、士大夫による文人畫と畫工による畫との間に一線を隔する、士大夫としての藝術觀が明確に示されている。

續けて107は、繪畫に關する笑話風の逸話である。

章郇公（得象）與石資政（中立）素相友善。而石喜談諧、嘗戲章云「昔時名畫、有戴松牛、韓幹馬、而今有章得象也」。世言閩人多短小、而長大者必爲貴人。郇公身既長大、而語聲如鐘、豈出其類者是爲異人乎。其爲相務以厚重、鎮止浮競、時人稱其德量。

章郇公は石資政と素より相い友善す。石喜んで諧を談じ、嘗て章に戯れて云う「昔時の名畫に、戴松の牛、韓幹の馬有り、今は章得の象有る也」と。世に閩人に短小多けれども、長大なる者は必ず貴人と爲すと言う。郇公身

既に長大にして語聲は鐘の如し、豈に其の類を出づる者は異人爲らんか。其の相爲るや務むるに厚重を以てし、浮競を鎮止し、時人其の徳量を稱う。

章得象と石中立はかねてより仲が良かった。中立は冗談を言うのが好きで、かつて得象に「昔の名畫に、戴嵩の牛と韓幹の馬があるが、今は章得象の象がある」とふざけて言った。閩（今の福建省）の人に小柄なものが多く、大柄なものは必ずやんごとなき身分の人であると世間では言われる。得象は體格が充分に大柄で、話し聲は鐘のように大きく響き、常人に抜きん出ているのは、まことに優れた人物であることを體現している。宰相の職務にあつては重々しく落ち著きがあり、自らを慎んでいたのが、當時の人々はその人徳を稱揚した。

章得象（九七八—一〇四八）は、浦城（今の福建省）の人。咸平五年の進士。『宋史』卷三一一の傳に、その人柄を伝える次のような話が見える。楊億が天子を補佐する器のある人物として得象を朝廷に薦める際に、彼と共に李昉の家で賭博をした時の話を取り上げた。章得象は一晚で錢三十萬負けたが氣にも留めず夜はぐっすり眠り、他日再度負けた時にも錢箱の封じ紙も開けずに、有り金すべてを即座に相手に渡すなど、度量の大きい人物であることを説いた。また、寶元元年（一〇三八）から慶曆五年（一〇四五）までの約八年間宰相の任にあつたが、自らの宗黨親戚に便宜を與えることはせず、清廉忠誠であつたことが記される。

石中立は洛陽の人。北宋の名相石熙載の子である。諧謔を弄することを好んだことが裏目に出て、景祐四年（一〇三七）に參知政事を拜するも、高官たる立場をわきまえていないという理由から、諫官であつた韓琦によって一年足らずで罷免され、太子少傅を以て致仕した。『宋史』卷一六三に傳がある。

戴嵩は戴嵩を指し、畫牛の名手の唐代の畫家で、『歷代名畫記』卷九に傳が見える。韓幹は畫馬で聞こえた同じく唐代の畫家で、同書卷九に傳が見える。ところが、章得象の象については、彼は北宋の政治家であり、畫論にその名を留めていない。これについて、宋の米芾『畫史』に「今人無名を以て有名たらしむること勝て敷うべからず。故に諺に云う、牛は即ち戴嵩、馬は即ち韓幹、鶴は即ち杜荀、象は即ち章得也」とある。杜荀は、晩唐の詩人である杜荀鶴を指し、杜荀鶴、章得象とともに、その名に含まれる「鶴」「象」に因んでかく仕立て上げられたのであって、然るべき根據を持たない。これは石中立が思いついた洒落なのか、それとも當時人々の口の上っていたものなのかは判然としない。因みに、鶴を描いた名畫としては、唐の薛稷（六四九—七二三）が挙げられる。また、戴嵩の牛については「書戴嵩畫牛」（『東坡題跋』卷五）に見える次の話がよく知られる。

蜀中有杜處士、好書畫、所寶以百數。有戴嵩牛一軸、尤所愛、錦囊玉軸、常以自隨。一日曝書畫、有一牧童見之、撫掌大笑曰「此畫鬥牛耶。牛鬥力在角、尾搐入兩股間。今乃掉尾而斗、謬矣」。處士笑而然之。古語有云「耕當問奴、織當問婢」。不可改也。

蜀中に杜處士有り、書畫を好くし、寶とする所百を以て敷う。戴嵩の牛一軸有りて、尤も愛する所なり、錦囊玉軸、常に以て自ら隨う。一日書畫を曝すに、一牧童之を見る有り、掌を撫でて大笑して曰く、「此の畫は鬥牛なるか、牛の鬥力は角に在りて、尾は兩股間に搐き入る。今乃ち尾を掉いて斗うは、謬れり」と。處士笑いて之を然りとす。古語に云う有り、「耕は當に奴に問うべし、織は當に婢に問うべし」と。改むる可からざる也。

韓幹について補足すれば、生没年不詳、大梁（開封）の人。王維に畫才を認められ、後に畫馬で名高い曹霸に學ぶ。玄宗は大馬を好んだことから、厩の四十萬頭の馬を韓幹に描かせた。杜甫「丹青引贈曹將軍霸」に「韓は惟だ肉を畫き、骨を畫かず」と見えるが、解釋の分かれる箇所でもある<sup>(16)</sup>。また、『圖畫見聞誌』卷一「敍國朝求訪」には、國初の圖畫蒐集に先立ち韓幹の馬圖が内府に献上されたことが記録されている。

太平興國間、天下郡縣に詔して、前哲の墨蹟圖畫を搜訪せしむ。是より先、荆湖轉運使は漢の張芝の草書、唐の韓幹の馬二本を得、以て之を獻じ、韶州は張九齡の畫像、並びに文集九卷を得て表進す。後の繼ぐ者は、勝けて紀すべき難し。又た待詔の高文進、黃居寀に勅して民間圖畫を搜訪せしむ。

その他、書畫にも言及される文人として69の林逋が挙げられるが、それに關わる記述は至って簡略なもので、記事のほとんどは詩にまつわる話に割かれる。

處士林逋、居於杭州西湖之孤山。逋工筆畫、善爲詩、如「草泥行郭索、雲木叫鉤轉」、頗為士大夫所稱。又梅花詩云「疏影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」。評詩者謂前世詠梅者多矣、未有此句也。又其臨終爲句云「茂陵他日求遺稿、猶喜曾無封禪書」、尤爲人稱誦。自逋之卒、湖山寂寥、未有繼者。

處士林逋、杭州西湖の孤山に居す。逋筆畫に工み、善く詩を爲り、「草泥行くこと郭索、雲木叫くこと鉤轉」の如きは、頗る士大夫の稱うる所と爲る。又た梅花詩に云う「疎影橫斜して、水は清淺たり、暗香浮動して、月は

黄昏」と。詩を評する者は、前世に梅を詠む者多し、未だ此の句有らざる也と謂う。又た其の臨終に句を爲りて「茂陵に他日遺稿を求むるも、猶お喜ばん曾て封禪の書無きを」と云うは、尤も人に稱誦せらる。逋の卒して自ら、湖山寂寥として、未だ繼ぐ者有らず。

隱士の林逋は、杭州西湖の孤山に居を構えた。逋は書畫に優れ、詩作に長じていた。「草泥行くこと郭索、雲木叫くこと鉤輶」のような句は、士大夫達に非常に賞賛された。また、「山園小梅」詩に「疎影橫斜して、水は清淺たり、暗香浮動して、月は黄昏」と詠んだ。詩を評する者は、これまで梅を詠む者が多かったが、まだこの句に匹敵するものは無いと言う。また、逋は辭世の句を作り、「茂陵に他日遺稿を求むるも、猶お喜ばん曾て封禪の書無きを」と詠み、人々にとりわけ褒め稱えられた。逋が亡くなってからは、西湖のほとりの山は寂しく靜かで、いまだ後を繼ぐものは現われていない。

林逋（九六七―一〇二八）は杭州（浙江省）の人。字は君復、眞宗によって和靖と諡される。幼くして孤兒となり、貧窮のなかにあつて生涯出仕しなかつた。景德三年（一〇〇六）に杭州の西湖のほとりにある孤山に廬を結んで隱棲した。妻を娶らず梅と鶴を愛し「梅妻鶴子」と呼ばれた。名聲が高まると、眞宗が食糧や衣料を贈るほどであった。詩も梅を題材にしたものに秀作が多い。隱棲前から名高い詩人であり、書くはしから破り捨てたため、現存するものは三百首餘りにすぎない。

「草泥行郭索、雲木叫鉤輶」の句は、現存する『林和靖先生詩集』四卷、補一卷にこの二句しか残っておらず、題名も不明。宋の沈括『夢溪筆談』卷十四藝文一によれば、歐陽脩はこの句をいつも愛唱しており、用語が新鮮で、

對句もびったりしていると考えていたようである。「鉤輶<sup>(17)</sup>」は鷓鴣<sup>しゃこ</sup>の鳴き聲。「郭索」はカニが歩くときのガサガサという擬音語。揚雄『太玄經』卷二銳卦に「蟹之郭索、心不一也」とある。また、宋の吳自牧『夢梁錄』一八に「西湖舊多葑田、蟹螯產之。今湖中官司開圻蕩地艱得矣」とあり、西湖は以前は葑田<sup>まこ</sup>が多く、蟹が生息していたが、現在役所がその場所を開鑿したため捕れなくなったという。

「疏影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」の詩句は「山園小梅」詩二首の其一（『林和靖先生詩集』卷二）に見え、歐陽脩の激賞を得て世に廣まったことが黃庭堅の證言によって知られる。<sup>(18)</sup>

衆芳搖落獨暄妍、占盡風情向小園。 衆芳は搖落するも獨り暄妍たり、風情を占め盡くして小園に向かう

疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏。 疎影橫斜して水は清淺たり、暗香浮動して月は黃昏

霜禽欲下先偷眼、粉蝶如知合斷魂。 霜禽は下らんと欲して先ず眼を偷み、粉蝶の如し知らば合<sup>あは</sup>に魂を斷つべし

幸有微吟可相狎、不須檀板共金尊。 幸いに微吟の相狎<sup>あひな</sup>の可き有り、檀板と金尊とを須いず

林逋の詩と書に關して、蘇軾（一〇三六—一一〇一）は「詩如東野不言寒、書似留臺差少肉（詩は孟郊に似るが寒々とした趣はなく、書は李建中に似てやや瘦せている所に特徴がある）」（『書林逋詩後』『集註分類東坡先生詩』卷二五）と評する。「東野」は中唐期の詩人である孟郊の字である。詩風が孟郊に比擬されるが、同じく蘇軾は孟郊と賈島の詩の特色を「郊寒島瘦（孟郊の詩風は寒々としていて、賈島の詩風は瘦せこけている）」（『祭柳子玉文』『蘇軾文集』卷六十三）と概括している。「留臺」は李建中（九四五—一〇一三）を指し、西京留司御史臺の官についたこと<sup>(19)</sup>に由来し、北宋初期の士大夫達が争って學んだと伝えられる能書家である。この批評は二人の詩をけっして否定し

ているものではなく、そこに新しい美意識を看取していると理解してよく、林逋の透明感ある鮮やかな詩風を蘇軾独自の感覚で捉えている。また、詩と書を同列に批評しようとする藝術・文學觀も垣間見えて興味深い。<sup>(20)</sup>「茂陵他日求遺稿、猶喜曾無封禪書」の詩句は、『林和靖先生詩集』卷四「先生將終之歲自作壽堂因書一絕以誌之」に「湖上青山對結廬、墳頭秋色亦蕭疎、茂陵他日求遺稿、猶喜曾無封禪書」とあり、『宋史』卷四五七の傳にも見える。

歐陽脩の著作の中で、この條以外に林逋について語られることはない。さらに、「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」の句が、歐陽脩の賞賛によって世に廣まり、後の詩話に引かれるようになったことを考えれば、超俗と高節を併せ持つ林逋は、晩年の歐陽脩にとって理想的な文人像であり、是非とも書き留めておきたい人物の一人であったと言っても過ぎることはなからう。

一方、書畫に關しては「筆畫に工む」と述べるに止まる。書は行書を善くし、眞蹟に「雜誌卷」「手札二帖」等がある。陸游は「君復書法又自高勝絶人、豫每見之、方病不藥而愈、方飢不食而飽（林逋の書法は氣高く優れ、ほかの追隨を許さない。藥を飲まずとも病氣が癒え、飢えていても満腹する）」（「跋林和靖帖」『渭南文集』卷三〇）と評す。黃庭堅は「林處士の書は、清氣人を照らす、其の端勁にして骨有るは、亦た斯の人の世を渉るに似るならんか」（『山谷別集』卷十一）と、その書は氣高い人格の發露であると評價している。書畫については紙幅を割かず、話があっさりとして關するエピソードへと移行するのは、上述の蘇軾の評に示されるように林逋の書風が李建中に類するものであったことに起因しているのではないだろうか。

北宋期に李建中を人格において初めて高く評價したのは歐陽脩であった。「世人作肥字說」（『筆說』）には次のようにある。

李建中清慎溫雅にして、其の書を愛する者は兼ねて其の爲人を取る也。豈に其の實有りて、然る後に之を存すること久しうせんか。古自ら賢哲は必ずしも書を能くするに非ざる也。惟だ賢者のみ能く存するのみ、其の餘りは泯泯として復た見みわれざるのみ。

李建中の書の愛好家たちは、名利を求めない清慎溫雅なその人柄を併せて評價基準に含めている。技藝に優れてさえいれば長く残るというものではない。古より賢哲の誰もが書を能くするわけではなく、賢者であることに加えて書をも能くするものだけが残り、その他は滅び絶えてしまう。その口吻は手放して李建中を褒めているわけではなく、むしろ字形そのものの優劣を基準として見れば、缺點が無いとは言えない含みを持たせているように感じられる。

「唐王師乾神道碑」(『集古錄跋尾』卷七)には、

右王師乾神道碑、張從申書。余初不甚以爲佳、但怪唐人多稱之、第錄此碑、以俟識者。前歲在臺社、因與秦玠郎中論書、玠學書於李西臺建中、而西臺之名重於當世。余因問玠、西臺學何人書。云學張從申也。問玠識從申書否。云未嘗見也。因此碑示之、玠大驚曰西臺未能至也。

とあり、歐陽脩は始め張從申の書をそれほど優れたものだとは思わず、唐代の人々がそれを賞賛するのを不思議に思っていた。秦玠は世に名高い李建中の書を學んでいたが、李建中の師である張從申の書を未だ實見していなかった。歐陽脩より張從申の王師乾神道碑を見せられると、李建中の及ばぬ優れた書であったことに驚歎した話を載せる。かく見ると、歐陽脩は李建中の書をそれほど高く評價していなかったことが分かる。因みに、『宣和書譜』や歐

陽脩に連なる蘇軾の評価においても同様に貶められている。<sup>(22)</sup>憶測を逞しくすれば、その李建中の書風に似ると稱せられた林逋の書にあっては、ことさらにこの條において取り上げるような対象ではなかったのではないだろうか。

#### 四 書と潤筆

次の88は、能書家としても聞こえた蔡襄が、友人の歐陽脩に頼まれて『集古錄』の序文を書いたことにまつわる逸話である。書の揮毫を介して行われる文人間の風雅な交流が語られている。

蔡君謨既爲余書「集古目錄序」刻石。其字尤精勁、爲世所珍、余以鼠須栗尾筆、銅綠筆格、大小龍茶、惠山泉等物爲潤筆。君謨大笑、以爲太清而不俗。後月餘、有人遺余以清泉香餅一篋者、君謨聞之歎曰「香餅來遲、使我潤筆獨無此一種佳物」。茲又可笑也。清泉、地名、香餅、石炭也、用以焚香、一餅之火、可終日不滅。

蔡君謨は既に余の爲に「集古目錄序」を書し石に刻す。其の字尤も精勁にして、世の珍とする所と爲る。余は鼠須栗尾の筆、銅綠の筆格、大小の龍茶、惠山泉等の物を以て潤筆と爲す。君謨大笑して、以爲らく太だ清にして俗ならずと。後月餘にして、人の余に遺わすに清泉香餅一篋を以てする者有り、君謨之を聞き歎いて曰く、「香餅來たること遅し、我が潤筆をして獨り此の一種の佳物のみ無からしむ」。茲れ又た笑う可き也。清泉は地名、香餅は石炭也、用いて以て香を焚く、一餅の火、終日滅せざる可し。

蔡襄はすでに私のために「集古目錄序」を揮毫し石に刻した。その文字はとりわけ力強く、世間では大切にされ

ている。私は、鼠須栗尾の筆、銅緑の筆置き、大小の龍茶、恵山泉などの品々を返禮として贈った。蔡襄は「甚だあっさりしていて、俗氣がない」と大笑いした。一か月餘り經ち、ある人から私の所に清泉で造られた香餅が一箱贈られてきた。蔡襄はそれを聞いて、「香餅が贈られてくるのが遅い。こんなによい返禮の品だけが私の所には届いていない」と嘆いて言った。これはまた笑える話である。清泉は地名である。香餅は石炭（固形の塊にした炭のことか）で、香を焚くの用に、一つの香餅で一日中火が消えることはない。

潤筆に關して、宋の劉克莊『後村先生大全集』卷一〇三「歐陽文忠公」には次のような話を載せる。

裴度（七六五年—八三九年。唐代の宰相）は皇甫湜（こうほしやく七七七年—八三五年。李翱、張籍と並び稱され韓愈に師事した中唐の文人）に福先寺の碑文を書いてもらうことにした。その返禮として厚く車馬とあやぎぬを贈ったが、皇甫湜は、碑文は三千字、一字あたり三匹のあやぎぬに値するとして、その少なさに激怒したので、裴度は笑って絹九千匹を贈った。この逸話に引き比べて、蔡襄の受け取った潤筆の少なさが指摘されている。<sup>23)</sup>

一方、この潤筆に關して、世知辛い一面を覗かせる記事も33に見える。王禹偁が翰林學士であった頃、夏州の李繼遷の辭令を草した。送られてきた潤筆は普通の數倍であったが、書狀がしきたりに合わなかったことから受け取らなかった。<sup>24)</sup>この話に續けて、近頃は、舍人院（詔敕の起草官）が辭令を書くことに係わり、潤筆物の支拂いの遅延を理由として人を遣って催促させたり、また支拂う義務のある者が知らぬふりをしていたりすることが常態となっていたことを記す。因みに、太宗の時に給仕中・諫官・待制以上が内外制を作成した場合の潤筆料を決めた潤資給付制が施行されたのは、この記事に見えるような潤筆の不拂いや督促の横行が恒常的な社會現象となっていたことが理由であると考えられる。これは内外制の潤資が特定の者に集中する不平等のほか、潤資の支拂いを巡る諸々の悪弊を是正す

るための政策であった。しかし、その後継続的に施行されたかどうかは詳らかにしない。<sup>(25)</sup>

『集古録』とは、歐陽脩が古代西周から五代に至るまでの碑文拓本や銘文入りの器物などの拓本を集録したもので、現在は散佚して傳わらない。その各巻尾に付したのが「跋尾」である。また、歐陽脩は子の棐に命じて、數百種の石刻の撰者名、立碑の年月など全體の大要を碑目ごとに注記した『集古録目』を作らせた。

ここで注意すべきは、記事中の「集古目錄序」という表記が、棐の撰になる『集古録目』に付した序文とも誤認されかねないことである。この點に關して、歐陽脩は自らの著作になかで「集古録序」「集古目錄序」「集古録目序」「集古録自序」と名稱を統一せず用いている節がある。余敏輝『歐陽修文獻學研究』（人民出版社、二〇一〇）一二二頁の考證により、嚴密に言えば、ここでは「集古録序」を指す。なお、揮毫時期は「與蔡君謨求書集古録序」〔外集〕目錄卷十九に注する「嘉祐七年」である。

鼠須栗尾筆については、明の謝肇淛『五雜俎』卷一二物部四に、陸佃『埤雅』を引いて「栗鼠は蒼黒くて小さいので、尾から毫を取って筆を製することができる。世にいうところの鼠鬚栗尾という筆である。その鋒は兔よりもしつかりしている」と述べ、續けて、實は尾であるのに髭と名付けているのは、今の竹鼯たけねずみのような種類であり家鼠ではないと撰者の見解を述べる。

歐陽脩「龍茶錄後序」や蘇軾「荔枝嘆」詩及びその自註によれば、茶の製法にも詳しい蔡襄は福建路轉運使の任にあった時に小龍團茶を完成させ、それを皇帝に毎年献上していた。團茶とは茶葉を蒸し固めた固形茶で、金箔で模様が施されたようである。宋の王辟之『澠水燕談錄』卷八にも「建茶（福建省建溪一帶に産する名茶）は江南に盛んにして、近歲、制作尤も精なり、龍鳳團茶は最上品と爲す」とある。<sup>(26)</sup>74や「龍茶錄後序」によれば、品質が絶精であったために、仁宗は輔政宰相の臣にも下賜したことがないほど珍惜していた。但し、「南郊大禮」や「致齋之夕」の折

に中書省と樞密院にそれぞれ一つ下賜され、各府四人で分け合って持ち歸ったが、飲まずに大切に家藏し、賓客が訪れた際に取り出しては鑑賞して楽しんだことを傳える。

74は「龍茶錄後序」に書かれた龍茶にまつわる内容がやや簡略に述べられ、「後序」に見えぬ内容としては、「二十餅重一斤」「其價直金二兩」といった重さと値段とを付け加えるのみである。「龍茶錄後序」に書かれているほぼ同じ内容を何故に『歸田錄』に敢えて再録しなければならなかったのか、歐陽脩の眞意を推し量り難いところである。また、かかる追加事項が特記しておくべきものであったとも考えにくい。

もう一點これに付随する事柄として、「龍茶錄後序」の文が上等な龍茶の小團が蔡襄より始まり、かく貴重であることを述べる贊辭で貫かれているが、蘇軾「荔枝嘆」詩の自註に見える歐陽脩の發言には、蔡襄が小龍團茶を献上していたことを皇帝に媚び諂う行爲として捉えられている。序文という性格から「後序」では贊辭を贈るのが通例であり、むしろ自註の發言の方が歐陽脩の眞意を表わしていると見る見方も成り立つ。因みに、『四庫全書總目』卷一五子部・譜錄類「茶錄二卷」の條はかえって蔡襄を擁護している。<sup>(27)</sup>

蘇軾「荔枝嘆」詩

武夷溪邊粟粒芽、前丁後蔡相寵加。爭新買寵各出意、今年鬪品充官茶。

武夷溪邊、粟粒の芽。前には丁、後には蔡、相寵加せる。新を争い寵を買って、各々意を出す。今年品を鬪わせ、官茶に充つ。

自註

大小龍茶始于丁晋公、而成于蔡君謨。歐陽永叔聞君謨進小龍團、驚嘆曰「君謨士人也、何至作此事」。大小の龍茶は丁晋公より始まり、蔡君謨に成せり。歐陽永叔、君謨の小龍團を進むるを聞いて、驚嘆して曰く「君謨は士人也、何ぞ此の事を作すに至るや」と。

惠山泉は梁溪（江蘇省無錫）惠山寺近くにある泉。蔡襄「即惠山煮茶」（『端明集』卷三）にも名水として讃える。<sup>(28)</sup>宋の王德遠『調燮錄』によれば、惠山泉は天下で最も點茶に適した水であり、宋代の士大夫の中には使いの者にそれを汲みに行かせるものも少なくなかった。このような社會的需要から、民間では惠山泉を砂瓶に詰めて販賣するものも現われたという。<sup>(29)</sup>また、明の『考槃餘事』卷四擇水にも「地泉、乳泉の漫流なる者を取る。梁溪の惠山泉の如きを最勝と爲す」とある。

また、宋の江休復『嘉祐雜誌』卷上には、蔡襄と蘇舜元（蘇易簡の孫、蘇舜欽の兄）が鬪茶をすることになり、蔡襄は品質のよい茶葉と惠山泉を使ったが、蘇舜元のは品質の悪い茶葉だったので、改めて竹瀝水を使ったところ勝ちを得た話が見える。茶の技藝を競うには、ただよい茶葉を求めればよいというものではなく、茶葉の特性および使用する水の相性とも大きく關わる繊細にして風雅なものであった。この記事の中にも、文人間の雅趣漂うやりとりが語られている。<sup>(30)</sup>

## 五 考證と交友

次の101は、葉子格なるものの變遷について、人づてに聞いたと思しき話柄も交えながら、書誌學的考證を加えている。

葉子格者、自唐中世以後有之。說者云、因人有姓葉號葉子青者撰此格、因以爲名。此說非也。唐人藏書、皆作卷軸、其後有葉子、其制似今策子。凡文字有備檢用者、卷軸難數卷舒、故以葉子寫之、如吳彩鸞『唐韻』、李邵『彩選』之類是也。骰子格、本備檢用、故亦以葉子寫之、因以爲名爾。唐世士人宴聚、盛行葉子格、五代、國初猶然、後漸廢不傳。今其格世或有之、而無人知者、惟昔楊大年好之。仲待制(簡)、大年門下客也、故亦能之。大年又取葉子彩名紅鶴、阜鶴者、別演爲鶴格。鄭宣徽(戩)、章郇公(得象)皆大年門下客也、故皆能之。余少時亦有此二格、後失其本、今絕無知者。

葉子格なる者、唐中世自り以後之れ有り。說者云く、人の葉を姓とし葉子青を號とする者有り此の格を撰し、因りて以て名と爲す。此の說非なり。唐人の藏書、皆な卷軸を作りて、其の後に葉子有り、其の制今の策子に似る。凡そ文字の檢用に備うる者有らば、卷軸數しば卷舒し難し、故に葉子を以て之れを寫す、吳彩鸞『唐韻』、李邵『彩選』の類の如きが是れ也。骰子格、本は檢用に備う、故に亦た葉子を以て之れを寫し、因りて以て名と爲すのみ。唐世の士人宴聚するに、葉子格を盛行せしめ、五代、國初猶お然り、後に漸く廢され傳らず。今、其の格、世に或いは之有るも、人の知る者無し、惟れ昔楊大年之れを好む。仲待制は、大年の門下の客也、故に亦た之れを能くす。大年又た葉子彩を取りて紅鶴、阜鶴と名づくる者は、別に演ユクて鶴格と爲す。鄭宣徽、章郇公は皆な大年の門下の客也、故に皆な之を能くす。余少き時亦た此の二格有るも、後に其の本を失い、今は知る者絶無なり。

葉子格と呼ばれるものは、唐の中頃以降に現われた。あるものは、葉を姓とし葉子青を號とする人物がこの格を撰したことに因んで命名されたと言うが、この説は誤りである。唐代の人々が所藏した書物は、みな卷子本であったが、後になって「葉子」が現われた。そのつくりは今の「策子（折本）」のようになっている。おおむね檢索に用いる書物の場合、卷子ではしょっちゅう廣げたりしまったりしにくいので、それで葉子に鈔寫した。吳彩鸞『唐韻』や李邵『彩選』（雙六用の書）の類がそれである。骰子格は、もともと檢索に用いるために葉子に鈔寫したことに因んで命名された。唐代の士人は酒宴に集まると、葉子格（のゲーム）が盛んに行われた。五代、宋初もまだ行われていて、その後しだいに廢れ途絶えた。今その格は、ひょっとして世間に存在するかもしれないが、それを知る人はいない。昔、楊億がこれを好んでいた。仲簡は、楊億の門人であるので、みなこの遊びができた。楊億はまた葉子彩（ゲーム）の紅鶴、阜鶴と呼ばれるものを、別名、鶴格とも呼んでいた。鄭戩や章得象はみな楊億の門人であるので、みなこの遊びができた。私の若い時分にはこの葉子格や骰子格が存在していたが、後にその本義が失われて、今知る人は皆無である。

この「葉子」の名の由來について、歐陽脩は葉子青なる人物の名に結びつける説を否定している。葉子青については、明の謝肇淛『五雜俎』卷六人部二「葉子格」陳晦伯が引く『咸定錄』によれば、「唐李邵爲賀州刺史、與妓人葉茂連江行、因撰骰子選謂之葉子」とあり、唐の李邵が賀州の刺史にあった時、江かわに遊んだ妓女の葉茂連の名に因むとする。<sup>(31)</sup>なお、同書には續けて「歸田錄云、有葉子青者撰此格、今其式不可考」と述べるが、むしろ歐陽脩は「此說非也」と言っているので、謝肇淛の思い違いか。

歐陽脩のいう「葉子」とは、「旋風裝」と呼ばれる裝丁形式を指す。<sup>(32)</sup>黃庭堅「跋張持義所藏吳彩鸞唐韻」にも彼が

目睹した『唐韻』の葉子に關する記述がある。<sup>(33)</sup> 旋風装とは紙を繋いだものを一定の間隔で折り、今でも佛典に見られる折帖の形にした上、巻首と巻尾を一枚の表紙に張りつけ、たためば一冊に、全部のばせば大きな紙の輪になるというもの。井上進氏は「この「葉子」は當時傳わっていた『唐韻』にほぼ共通してみられる、すこぶる特徴的な装丁であった」と述べ、「長い傳統をもつ卷子本は、唐人にとつていわば書籍の「正しい」姿であったはずで、新參の冊子型書籍はいかにも卑俗な、利便性のため書籍に備わっているべき典雅さを失ったものと感じられたことであろう」と指摘する。(井上進『中國出版文化史―書物世界と知の風景―』名古屋大學出版社、二〇〇二、九四頁參照)

「葉子格」については、『五雜俎』卷六人部二「葉子格」に「楊用脩は以て今の紙牌に似ると爲すも、晦伯元瑞は之に非ずとし、皆な未だ的確證有らざる也。晦伯謂う、楊大年之れを好むは、『青瑣雜記』に同輩と葉子を打つの語有るに因るに過ぎざる耳と」とあり、どのようなものを指すのかいまだに確證がない狀況を述べている。五代、宋初にはまだ行われており、後に廢れたようである。「骰子格」については、『五雜俎』同卷に「唐李邵有骰子選格、宋劉蒙叟、楊億等有彩選格。即今升官圖也。諸戲之中最爲俚俗」とあり、現在の雙六のような「升官圖」に相當するゲームであると述べる。紅鶴、阜鶴については、李清照「馬戲圖式」(『馬戲圖譜』)にその名が見え、骰子格同様にゲームの一種であると推察される。

書誌學的考察に續いて、唐代の士人たちは酒宴の席では「葉子格」と呼ばれるゲームのようなものをして遊んだことが述べられ、さらに昔楊億が門下の仲簡、鄭戡、章得象と共にこのゲームに興じたというやや碎けた話が語られる。章得象に關する逸話は<sup>(34)</sup>107(前掲)にも見え、仲簡と鄭戡の二人については、9楊億の豫言が的中するという怪異譚風の話のなかにも登場する。

ところで、『歸田錄』において楊億(九七四—一〇二〇)が登場する記事は多く、計八條に見えている。19楊文公

は文豪として知られていたが、その剛直の性格ゆえに人付き合いが上手くいかず、それを快く思わぬ者から讒言され晩年眞宗からの恩愛が遠のいていった話。その氣性の強さは、58翰林學士にあった頃に契丹に與える答書を草し、文字の改正について眞宗より朱批を加えられたことに對して、すみやかに自らの解職を求めた話にもよく示されている。54楊億は門人達に文章を作る際には俗語を使わないよう戒めるテーゼを示し、自ら草した奏章「伏して惟みるに陛下の徳九皇を邁<sup>まさ</sup>る」の句を言ったところ、鄭戩が「未だ何時に生菜を賣るを得るかを審びらかにせず（いつ韭の根が賣れるか分からない。筆者注：「邁九皇」の發音が「賣韭黃」に通じる）と聞き誤り、楊億が大笑いしたユーモア溢れる話。57文章を作る際にきまって門人や賓客を宴會や賭博に招いたが、その談笑喧噪の中にあっても、短い時間で數千言の文章を仕上げてしまう文豪ぶりを語る話。67寇準が中書にあった頃、同僚と戯れに對句を作ることになり、「水底の日は天上の日となす」と言ったところ、誰も應じることができずにいたが、たまたまそこにやって來た楊億が「眼中の人はれ面前の人なり」と返し、一座が對と賞賛した話。27寇準は頼みとしていた眞宗が病に倒れ不利な情況下に置かれることになった。そこで、天禧四年（一〇二〇）、皇太子の名義を借りて皇后劉氏及び丁謂、錢惟演等反對派を抑え込もうとクーデターを畫策したが未遂に終わった。<sup>35</sup>寇準の一黨に連なる多くの朝士が斥逐されるなか、楊億だけはその才能を惜しまれて難を逃れることができた話などがある。<sup>36</sup>

ここでしばし文學に目を移せば、楊億は、晩唐の李商隱に倣い典故を多用し修辭を重んじた「西崑體」の領袖であり、古文派の歐陽脩と文學觀において對立する。『六一詩話』二二條には、

楊大年と錢（惟演）、劉（筠）、數公と唱和す。西崑集の出づる自り、時人争いて之に效い、詩體一變す。而して先生、老輩、其の多く故事を用うるを患う。語僻にして曉り難きに至る。殊に自らはれ學者の弊なるを知らず。

と述べており、ここでは歐陽脩の楊億に對する非難めいた言辭が綴られている。しかし、『歸田錄』においては楊億の文章家としての才を認めたくえで話が展開されており、詩話とは異なる歐陽脩の眼差しを見出すことができる。

## 六 おわりに

以上を振り返ると、『歸田錄』には書畫に觸れた記事は見られるものの、いずれも正面から論じた記述は見られず、話の重點は逸話の紹介に充てられている。また、書論に關しては『筆說』（『歐陽文忠公文集』卷一一九）『試筆』（同上卷一三〇）に譲られているため、内容に應じて書き分けられていると考えられる。<sup>37</sup>『歸田錄』は、書物の性格上、言うまでもなく歐陽脩の書畫論或いは文章論を考えるうえで十全なものではないが、歐陽脩の文化全般にわたる志向が隨所に窺え、看過できない存在であることは否定できない。

例えば、66は當時の畫壇の情況を知る上で貴重な資料となっている。また、趙昌の畫に對する評價は、歐陽脩の著作の中で唯一の記述であり、そこに示される繪畫觀は間接的に彼の書論にも相通じるものと思われる。84文字の規範化への追求には、歐陽脩自身の字學への深い見識があつてこそ話題として採用されたものであり、それは『集古錄跋尾』に見える『干祿字樣』や『干祿字書』への度重なる言及が傍證となる。さらに、101「葉子」を取り上げ書誌學的見地から考證を加えていることなどは、金石研究で得られた文物考證の知見がその下地になっていると言えよう。

また、文人間の交流を通じてやり取りされる身近な品々への愛好が、風雅なる日常の世界に彩を添えている。88に見える「小團（小龍團茶）」などは、宋の類書である高丞『事物紀原』に『歸田錄』が出典として引用されるが如く、そこに介在される「物」に關する詳細な記録も、當時を知る上で貴重な證言となっている。これらは歐陽脩本人

の當初の執筆意圖である「閑居の覽に備うる」を遙かに越え、北宋社會の實相を知る上での手掛かりを我々に與えてくれているのである。

## 注

- (1) 『宋文選』卷七王禹偁文「投宋拾遺書」「矧天與其時、身得厥位、則追還唐風、不為難焉。」
- (2) 『歐陽文忠公文集』卷四七「答吳充秀才書」「大抵道勝者文不難而自至也。」
- (3) 『集古錄跋尾』卷四「范文度模本蘭亭序」「宋興百餘年間〈中略〉獨字書之法寂寞不振、未能比蹤唐室。」
- (4) 東英壽「歐陽脩の『歸田錄』について」(『九州中國學會報三四』一九九六、九州中國學會)。
- (5) 宋という姓が國號と同じくし、名が天を祭る儀禮を指すこと。「郊」の音が「交」に通じ、王朝交代の意味にもなることから、縁起が悪いとして改名させられた経緯を語っている。
- (6) 『集古錄跋尾』卷一〇「郭忠恕小字說文字源」「頗奇怪世人但知其小篆、而不知其楷法尤精。然其楷字亦不見刻石者、蓋惟有此耳、故尤可惜也。五代干戈之際、學校廢、是謂君子道消之時、然猶有如忠恕者。國家爲國百年、天下無事、儒學盛矣、獨於字書忽廢、幾於中絶。今求如忠恕小楷不可得也、故余每與君謨歎息於此也。」
- (7) 例えば、次のような記述が擧げられる。
- 宋の朱翌『猗覺寮雜記』卷下「唐百官志有書學、故唐人無不善書、遠至邊裔書史里儒、莫不書字有法、至今碑刻可見也。往往勝於今之士大夫、亦由上之所好、有以勸誘之。貞觀中、集王羲之書爲一百五十卷、選貴臣子弟有性識者以爲宏文館學生、內出法書、命之習學、人間有善書者、亦召入館、海內向風、工書者衆見。」
- 宋の馬永卿『嬾真子』卷三「唐人字畫、見於經幢碑刻文字者、其楷法往往多造精妙、非今人所能及。蓋唐世以此取士、而吏部以此爲選官之法、故世競學之、遂至於妙。唐選舉志云「凡擇人之法有四、一曰身、體貌豐偉、二曰言、言辭辯博、判斷公事、既極美、四曰判、文理優長」。或曰「此蔽政也、豈可以字畫取人乎」。難之者曰「今之士人於此、狀貌奇偉、言辭辯博、判斷公事、既極優長而更加以字畫適美、有歐虞褚薛顏柳之法、士大夫能全此美者、亦自難得況銓選之間乎」。聞之者皆服。」
- (8) 阿辻哲次『漢字の社会史 東洋文明を支えた文字の三千年』(吉川弘文館、二〇一三)第三章參照。「正」とは、確實に根據があ

り由緒正しい字形を指し、天子への上奏文や學問的著述等の正式な文章に用いる正統な文字であり、科擧の答案にはこれを使用することが望まれるもの。「通」とは、すでに長年の使用を経て習慣化された異體字を指し、特段排除する理由もないが、正規の文字とも言い難く、役所内での文書や手紙等の使用にも許されるもの。「俗」とは、學問的な根據を持たない巷間の俗字を指し、商賣の帖簿や藥の處方箋等日常的な用途に使用を認められたものである。

(9) 『宋史』卷一〇一禮四「皇祐二年三月、仁宗謂輔臣、「今年冬至日、當親祀園丘、欲以季秋行大享明堂禮。然自漢以來、諸儒各爲論議、駁而不同。夫明堂者、布政之宮、朝諸侯之位、天子之路寢、乃今之大慶殿也。況明道初合祀天地於此、今之親祀、不當因循、尚於郊壇寓祭也。其以大慶殿爲明堂、分五室於內」。李燾『續資治通鑑長編』卷一六七皇祐二年癸酉の条「先是、宋庠建議、以今年當郊而日至在晦、用建隆故事、宜有所避、因請季秋大享於明堂」。

(10) 米芾（一〇五一—一〇七）宋の四大家の一人。徽宗の治世に書畫博士となり、宮中で書畫や古器物の鑑定に従事した。

(11) 王闢之「滎水燕談錄」卷七「歐陽文忠公以爲成仕至尚書郎。按白（宋白）與成同時、人又與成子覺竝列史館、其所紀宜不妄、不知文忠公何以據也。正當以誌爲定」。王明清『揮麈錄』卷六「歐陽文忠公歸田錄乃云「李成仕本朝尚書郎」、固已誤矣」。

(12) 蘇耆『次續翰林志』「蘇易簡乃於玉堂後廡建二書閣、〈中略〉閣之上下悉命僧巨然、畫烟嵐曉景以布之、筆跡野逸、效李成之作、而又自成一家」。

(13) 竹浪遠「北宋期における李成の評價とその文人畫像形成について―子孫・鑑賞者・李郭系畫家との關わりから―」（『古文化研究（第九號）』黒川古文化研究所、二〇一〇）五四頁参照。

(14) 『図画見聞誌』卷四「包貴、宣城人。善畫虎、名聞四遠、世號老包也。包鼎、貴之子。雖從父訓、抑又次焉。子孫襲而學者甚衆、雖非類犬、然終不能踐貴、鼎之闕矣」。

(15) 『宣和畫譜』卷一三「畜獸敘」「包鼎之虎、裴文睨之牛、非無時名也。氣俗而野、使包鼎之視李漸、裴文睨之望戴嵩、豈不縮手於袖間耶。故非譜之所宜取」。

(16) 和田英信「蘇軾の詠畫詩：元祐年間を中心に」（『お茶の水女子大學中國文學會報』、二〇一一）

(17) 沈括『夢溪筆談』卷十四藝文一「歐陽文忠常愛林逋詩「草泥行郭索、雲木叫鉤輻」之句、文忠以謂語新而屬對新切」。

(18) 黃庭堅「豫章黃先生文集」二六「書林和靜詩」「歐陽文忠公極賞林和靜「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」之句、而不知和靜別有詠梅一聯云「雪後園林纔半樹、水邊籬落忽橫枝」、似勝前句、不知文忠公何緣棄此而賞彼」。

- (19) 李建中(九四五—一〇一三)京兆(陝西省)の人。字は得中。太平興國八年(九八三)の進士。三度西京留司御史臺の官に至ったことから、李西臺と稱される。名利を求めず恬淡として、好んで山水に遊び、自ら巖夫民伯と號した。郭忠恕『汗簡』を科斗文字で書いて献上し、太宗にも嘉賞された。『宋史』卷四四一、『宣和書譜』卷二に傳がある。行書『同年帖』『貴宅帖』『土母帖』などがある。
- (20) 賈島(七七九—八四三)范陽(河北省)の人。字は浪(或いは閻)仙。家が貧しかったために僧侶となった。都に出たところ、たまたま韓愈に詩才を認められて選俗し進士にも及第したが、官途には恵まれなかった。當時、元稹や白居易の平俗な詩風が流行するなか、苦吟による詩句の鍛錬を主張した。「推敲」の故事によってよく知られている。
- 孟郊(七五一—八一四)湖州武康(浙江省)の人。一説に洛陽の人とも言う。字は東野。徳宗の貞元二年(七九六)三度目にして進士に及第し、溧陽(江蘇省)の尉を授けられた。氣難しい人柄で生涯不遇であつた。張籍、賈島らとともに韓愈一派の詩人に屬し、窮苦、怨恨、憂愁を詠じたものが多い。
- (21) 『集古録跋尾』卷十「楊凝式題名」五代之際有楊少師、建隆以後稱李西臺。二人者筆法不同、而書名皆爲一時之絶」とあり、楊凝式と李建中を書壇の雙璧となす者として高く評價するが、これは歐陽脩個人の見解というよりは、むしろ世間一般の見解として筆者は捉える。
- (22) 蘇軾『東坡題跋』卷四「評楊氏所藏歐蔡書」國初李建中號爲能書、然格韻卑濁、猶有唐末以來衰陋之氣。また、『宣和書譜』卷十二に「論書者以爲尙有五代衰陋之氣、蓋以其作字淳厚不飄逸致然」とあり、李建中の書には五代之衰微した卑しい名残があり、淳厚ではあるが飄逸さに缺ける所が非難を受ける要因となっている。
- (23) 『後村先生大全集』卷二〇三「歐陽文忠公」昔皇甫湜爲裴公作記、自云字直三縑。蔡字比之湜文價當十倍。今僅以宣肇八十銅綠筆格、花石盆各一、龍茶三餅、惠山泉八缶爲餉。世固有持燕辭惡札而受人不貲之需毫者、豈不有愧色哉。
- (24) 王禹偁(九五四年—一〇〇一年)字は元之。至道元年(九九五年)に翰林學士兼知審官院となる。李燾『續資治通鑑長編』卷三七至道元年の條に「禹偁嘗爲李繼遷草制、繼遷送馬五十四備濡潤、禹偁以狀不如式、却之」と見える。
- (25) 澤田雅弘「潤例の發生と展開―明・清における文人賣藝家の自立―」『書學書道史研究』書學書道史學會、一九九七、二二—三九頁參照。
- (26) 歐陽脩「龍茶錄後序」「茶爲物之至精、而小團又其精者、錄序所謂上品是也。蓋自君謨始造而歲貢焉、仁宗尤所珍惜、雖輔相之

臣未嘗輒賜。(中略)宮人剪金爲龍鳳、花草貼其(茶餅を指す)上。

(27) 『四庫全書總目』卷一「五子部・譜錄類」茶錄二卷の條によれば、費昶『梁溪漫志』に、陳東の『茶錄』の跋を引き、蔡襄が閩漕であった時に小龍團を献上したことについて、これまで彼を敬慕してきた富弼が失望した話を載せる。しかしながら、胡仔『溪漁隱叢話』によれば、造茶は轉運使の職掌(閩漕をさす)であり、蔡襄はその製法に詳しく、また公務の一端でもあった。さらに、歐陽脩が記した『龍茶錄後序』にも、非難を加えるような言葉も見當たらない。富弼の言には根據がなく、蘇軾の「荔枝嘆」にある「前に丁後に蔡、養を口體に致す」の句に附會したものであり、事實ではなく、陳東の跋に述べているようなことは道理に適う論ではないとしている。また小龍團なる茶が蔡襄の故郷の特産であり、文人の風雅の趣味から献上するのであって、目くらまを立てるようなことでもないという口吻である。

(28) 蔡襄「即惠山煮茶」(『端明集』卷三)「此泉何以珍、適與眞茶遇。在物兩稱絕、於豫獨得趣。鮮香飭下雲、甘滑杯中露。當能變俗骨、豈特潤塵慮。書靜清風生、飄蕭入庭樹、中含古人意、來者庶冥悟」。

(29) 王德遠『調變錄』「水之宜茶者、以惠山石泉爲第一、故士夫多使人往致之、市肆間亦以砂瓶盛貯售利者」。

(30) 江休復『嘉祐雜誌』卷上「蘇才翁嘗與蔡君謨鬥茶、蔡茶精、用惠山泉、蘇茶劣、改用竹瀝水煎、遂能取勝」。

(31) 李昉『太平廣記』卷第一三六「徵應二(帝王休徵)・李邵」には李邵を李邵としている。

(32) 元の王惲『玉堂嘉話』卷二「秋澗先生大全集」卷九十四に「吳彩鸞龍鱗楷韻。後柳誠懸題云、吳彩鸞世傳謫仙也。(中略)時泰和九年九月十五日、題其冊。共五十四葉、鱗次相積、皆留紙縫、天寶八載製」とあり、吳彩鸞筆『唐韻』が龍鱗裝仕立てとなり、全部で五十四葉あり、それを鱗のように積み重ね、みな紙縫を留めていると述べる。本論では、この龍鱗裝も旋風裝の一つに含む見解に従っておく。一方、高田時雄氏は、「従來の旋風裝と稱するものは龍鱗裝の形式とは全く異なる」という見解を示す。

また、「敦煌韻書の殘卷や斷片を詳しく見れば、非常に多くの韻書が龍鱗裝の體裁を持っていたことが判明する。さらには韻書のみならず、占書などにも時に用いられていることは注目される。しばしば翻閱の必要があるものは、その便宜のために卷子ではなくこの形式を採用したのであろう」と指摘する(高田時雄「敦煌韻書の發見とその意義」『草創期の敦煌學』知泉書館、二〇〇二、二四七頁—二四八頁)。

(33) 「跋張持義所藏吳彩鸞唐韻」(『山谷別集』卷十一)「右仙人吳彩鸞書孫愜唐韻、凡三十七葉、此唐人所謂葉子者也。按彩鸞隱居在鍾陵西山下、所書唐韻民間多有。余所見凡六本此、一本二十九葉、彩鸞書其八葉、後人所補、氣韻肥濁、不相入也」。

(34) 一つは、貧しい仲簡を一目見て、将来高官に就くことを予言した話。もう一つは、謝希深が中壽まで生きられないことを予言した中した話に鄭戩が登場する。

「仲簡揚州人也、少習明經、以貧傭書大年門下。大年一見奇之、曰「子當進士及第、官至清顯」乃教以詩賦。簡天禧中舉進士第一甲及第、官至正郎、天章閣待制以卒」。

「謝希深為奉禮郎、大年喜其文、每見則欣然延接、既去則歎息不已。鄭天休在公門下、見其如此、怪而問之。大年曰「此子官亦清要、但年不及中壽爾。希深官至兵部員外郎、知制誥、卒年四十六、皆如其言」。

因みに、謝希深は歐陽脩が平素文章を作るうえで着想を得やすい所として「馬上、枕上、廁上」であると語った相手として知られる(『歸田錄』卷二)。

(35) この事件の経緯について、王瑞來『宋代の皇帝権力と士大夫政治』(汲古書院、二〇〇一)第八章第四節に詳しい。

(36) 『續資治通鑑長編』卷九六天禧四年丁丑の條に「及準敗、丁謂召億至中書、億懼、便液俱下、面無人色。謂素重億、無意害之、徐曰「謂當改官、煩公爲一好詞耳」。億乃稍安、卒保全之。當時宰相愛才如此、謂姦邪、議者亦以此稱焉」とあり、中書に召しだされた楊億は小便を垂れ顔面蒼白となるが、丁謂より害する意圖がないことを聞かされると、ほっと胸を撫で下ろした。

(37) 詩に關して、興膳宏氏は「宋代詩話における歐陽脩『六一詩話』の意義」(『日本中國學會創立五十年記念論文集』、一九九八所収)において「二つの書(『六一詩話』と『歸田錄』を指す)は、詩や詩人を對象とする話題において重なり合う内容を持ちながら、意識的に書き分けられているところがあるのもやはり無視できないだろう」と指摘する。